

MACF 礼拝説教要旨

2021年8月22日

「前置き」

ルカによる福音書1章1節～4節

1:1-2 わたしたちの間で実現した事柄について、最初から目撃して御言葉のために働いた人々がわたしたちに伝えたとおりに、物語を書き連ねようと、多くの人々が既に手を着けています。

1:3 そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。

1:4 お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていただきたいのであります。

今日からルカの福音書の学びをはじめます。

ルカはギリシャ語のルーカノス(光を与えるの意)の愛称です。

彼の名はパウロ書簡に3度登場しています。(コロサイ4:14、2テモテ4:11、フィレモン24)。コロサイ4:10～14によるとルカは異邦人だったらしく、名前がギリシャ語名であること、見事なギリシャ語を駆使していることなどから推測すると、ギリシャ人の可能性が高いと言われています。また、ルカは「医者」でもありました。(コロサイ4:14)

1) 福音を弁明するための手紙のような福音書

この福音書は「テオピロ」という人にあてて書かれました。

テオフィロという名前は使徒言行録にも出てきます。

「1:1-2 テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。」(使徒言行録1:1)つまり、こ

のルカによる福音書は前編であり、使徒言行録は後編ということになります。

ルカの福音書はイエス様の誕生から復活までが書かれ、使徒言行録では復活後の教会の誕生と聖霊の力による使徒たちの活動が記録されています。こうなるとルカによる福音書の学びのあとは当然、使徒言行録が続くことになりますね。

テオフィロという名前は「神を愛する人」という意味ですから、実際にそういう人がいたのかそれとも、神様を愛しているクリスチヤンたちのことをさしているのかよくわかりませんが、イエス様が何をどう教えたのか、どう生きたのかをしっかり伝えようとしています。

2) 教えの真実と歴史的な出来事

ルカはまず、「私はキリストに関わる出来事を初めから詳しく調べました」と語っています。目撃者の記録、弟子たちの話し、具体的な、歴史的な出来事をチェックしましたと言っているのです。

さて、文章の記録というのはとても難しい面があります。ここでこういうことがあります。その次にこういう出来事があったと記録することには大きな意味があります。具体的に何があったのかわかるからです。

でも、それにどんな意味があったのかとか、それが人々にどういう結果をもたらしたのかという記録にはかなり「主観」が入ります。

そこで客観的事実と主観的事実との間の区別が少し必要になってきます。

また当時の文化や習慣などの問題を考えると、今の私たちの生活の仕方をそのままダブらせることは難しいと思います。

それでも、ルカは異邦人の立場でユダヤの歴史に詳しくない人にもわかるように書いていますのである程度、マタイによる福音書などよりも、わかりやすいかもしれません。

3) わかるということ

1:4 お受けになった教えが確実なものであることを、よく分かっていただきたいのであります。ルカは書きました。

「わかって欲しい」とルカは願っています。

ところが文章を読んで「わかる」という場合、その「わかり方」がいろいろあるのです。文脈を理解し何が起こったのかを理解するという判り方もあります。その文章に書かれている内容を理解した上で、読者に求められているものは何かを感じ取るという判り方もあります。いずれにしても、それは個人個人に委ねられています。つまり、聖書を読んで内容を理解できたからと言って、十分に「わかった」ことになりません。信じるとか信頼するとかいうところを探られるからです。

ヨハネはそのことを端的に書き表しました。

これはヨハネの言葉ですが

20:30 このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていません。

20:31 これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

21:24 これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている。

21:25 イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つ一つ

を書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。

ルカがテオフィロに「よくわかっていただきたい」と書いたのも、ヨハネの考えと同じ思いからだったと思います。

つまり、イエス・キリストを主として、神の御子として信頼すること、それによって神との平和を得ること。

そのための文章としてこの福音書は書かれているのです。

そうすると、いわゆる読解力だけでなく「感じ取る力」が重要な役割を果たすことになります。

そして、当然、聖霊による助けがなければ、自分に救いが必要なことも、助けが必要なことも、神の愛も神との平和も理解できないということもしっかり心に覚えておく必要があります。

福音書を読み終えたら自動的にクリスチャンになっていたということではありません。そうであつたら、どんなに楽なことでしょう。

その部分について神様は決して無理強いをなさいません。また自動的にクリスチャンにしてしまうようなこともなさいません。

ある意味での「自由」を設けています。

ただ、しっかり読めば、きっと感じ取れることがたくさんあるので心はある方向に傾くことはあります。しかし、いずれにせよ、無理強いはできません。

聖霊による助けを受けながら、文脈と内容を理解し、そこにある神の福音をしっかり感じ取る、しっかり読み取ることができますように。

それがルカの序文の心です。

祝福がありますように。

関根一夫

＊＊

MACF 礼拝映像はこちらです。

<https://youtu.be/F0qjOMJOds>